京都では祇園祭に
"ヒオウギ"を生ける風習があります。

ヒオウギは扇状の葉を持つことからヒオウギ（檜扇）と名付けられました。

祇園祭は、疫病が流行した869年6月7日に始まり、災厄除去を祈るために行われた祇園御霊会（ごりょうえ）です。

古代、ヒオウギで悪霊を退散したという言い伝えから、厄除けの花として飾られるようになりました。

こうした習慣や文化を継承・普及するため、京都府花き振興ネットワーク※では、祇園祭の山や鉾を所有する町に、積極的にヒオウギを飾っていただく取組を進めています。

「ヒオウギ」ってどんな花??

アヤメ科アヤメ属の多年草です。花は8月ごろ咲き、直径5～6cm程度。黄色や橙色の花を咲かせ、放射状に開きます。午前中に咲き夕方にはしぼむ一日花です。

花後に付ける黒いタネは射干玉（ぬばたま）と呼ばれ、和歌で「夜」や「黒」「暗き」などにかかる枕詞「ぬばたまの」はこのタネの色から来ているとも言われています。

※【京都府花き振興ネットワーク】
生産・流通・小売・行政の各関係者が一丸となって、京都府産花きの魅力発信と花きの需要拡大を図ることを目的として活動する組織です。

（製作）京都府花き振興ネットワーク／京都市花き振興協会